

中国の高等教育機関における日本語音声教育事情 -アンケート調査・参与観察・交流活動の結果から-

劉 羅麟 (東京大学大学院工学系研究科)

1. はじめに

近年、日本語教育において音声の重要性が再認識されるようになり、「学習者の自己実現を支える音声教育」が提唱されている(戸田 2011、千 2017 など)。日本と一衣帯水の中国では、日本語学習者・教師・実施機関の数が世界最多⁽¹⁾である一方、日常生活で日本語を聞いたり話したりする機会が多いとは言えない。このような環境において、中国の日本語教師は音声をどのように捉え、学習者にどう指導しているのであろうか。

中国における音声教育の事情については、劉 (2012) や寺田 (2015) などの研究がある。その調査結果では、発音の授業が開設されている大学もあるが、音声教育の必要性が認識されていても体系的な音声教育が行われていない場合が多いようである。現状を把握するために、2023年8~9月の間に、筆者は中国の成都・西安・南京・上海・大連の五都市において後述する活動を行った。本稿では、活動の様子と成果を報告し、中国における日本語音声教育事情について述べる。

2. 活動の概要

2-1 事前のアンケート調査

活動の前に、中国の高等教育機関に所属する日本語教師を対象にアンケート調査を行った。このアンケートは、Liu (2023) の「Belief-Experience-Opinion Model (理念・経験・意見モデル)」に基づいて作成したものである。アンケートでは、教師が順に自身の発音指導の【経験】、音声教育に対する【理念】(≒教育観)、現状に関する分析と将来に対する展望という【意見】を回答する。

2-2 学内見学および授業の参与観察

今回の活動では、成都における民間の日本語学校を訪問した後に、西安・南京・上海・大連における九つの大学を訪問し、そのキャンパスや日本

語教育関連の施設などを見学した。許可を得た一部の日本語科目には見学者として参加し、発音指導の様子を中心に参与観察を行った。

2-3 発音指導に関する交流活動

各機関を訪問する際に、発音指導に関する交流活動を行った。活動では、発音にまつわる学習者のエピソードを紹介し、参加者と一緒に音声教育の必要性について考えた。また、参加者が普段行っている発音指導の方法や悩みについても意見交換を行った。続いて、筆者は学習者の母語や母方言を活用した音声教育の理論的枠組み(劉 2023a) について説明し、自身の教育実践から具体的な指導例や学習者の反応を紹介した。

3. 中国五都市における日本語教育

活動報告の前に、本章では各教育機関における日本語教育事情について簡単に説明する。紙幅の都合上、学部の日本語専攻を中心に述べる。

3-1 成都の日本語学校における日本語教育

本活動では主に高等教育機関における日本語教育を対象とするが、比較対象として、成都における日本語学校を訪問した。

今回訪問した二校(「祝日計画」「知日塾」)は、成都市内の繁華街に位置する民間の日本語学校である。在籍生の殆どは、日本語を趣味として学んでいるというよりも、一年ないし半年後に日本に留学するという極めて明確な目標を持っている。クラス単位での一斉授業だけでなく、各学習者のニーズやレベルに応じたマンツーマン授業も多い。日本語の学習のほか、日本文化の体験活動や進学の仕方に関する指導も行われている。

3-2 西安の大学における日本語教育

西安では、西安外国語大学と西安翻訳学院の二

校を訪問した。いずれも、日本語を含む様々な外国語学科を設置している高等教育機関である。

西安外国語大学では、日本文化経済学院に日本語専攻が設置されている。この専攻では「日本語+」と呼ばれる、翻訳・英語・経済貿易・人工知能・師範という五つのコースに分かれている⁽²⁾。うち人工知能コースは2022年に、技術の進歩に適応するためにITコースから発展したという。

西安翻訳学院では、亜欧語言文化学院に日本語専攻と日本語応用専攻が設置されている。日本語応用専攻はさらに、商務と旅行という二つのコースに分かれている。教育方針としては、「体験型学習」が重視されており、企業と協定を結んで学生のインターンシップ活動を展開している⁽³⁾。

3-3 南京の大学における日本語教育

南京では、南京信息工程大学を訪問した。気象学などを特色とする理工系の大学である。

南京信息工程大学では、文学院に日本語専攻が設置されている。この専攻では知識の習得だけでなく、実践能力の養成も重視されている。例えば、応用日本語科目(経済貿易・旅行・職場)のほか、日本語スピーチ、翻訳・通訳ワークショップ、商務日本語などの実践活動も展開されている⁽⁴⁾。

3-4 上海の大学における日本語教育

上海では、復旦大学と上海外国語大学の二校を訪問した。前者は総合大学であり、後者は36の言語系専攻を誇る語学系の大学である。

復旦大学では、外国語言文学学院に日本語専攻(「日語語言文学」)が設置されている。この専攻ではその名称どおり、言語と文学が両方重視されており、日本語そのものに関する科目のほか、日本文学史、古典文学、日本現代作家とその作品研究などの科目も開設されている⁽⁵⁾。

上海外国語大学では、日本文化経済学院に日本語専攻(「日語語言文学」)と、「国際経済と貿易(日本語)」という複合型専攻が設置されている。前者には日本語コース以外に、英語を副専攻とするコースや、入学前から日本語学習経験を持つ学生を対象とする通訳のコースもある⁽⁶⁾。

3-5 大連の大学における日本語教育

大連では、語学系の大連外国語大学、総合大学である大連海事大学と東北財経大学、専門型の遼寧轻工職業学院の四校を訪問した。

大連外国語大学では、日本語学院に日本語専攻が設置されている。基礎段階では日本語や日本文化に関する学習が中心で、学生の日本語運用能力を鍛えている。上級段階では言語文化・国際商務・通訳・翻訳という四つのコースに分かれ、多方向の総合的応用能力を養成している⁽⁷⁾。



図1 大連外国語大学への訪問

大連海事大学では、外国語学院に日本語専攻が設置されている。四技能(聞く・話す・読む・書く)に着目した科目のほか、通訳・翻訳や日本文学に関する科目も開設されている⁽⁸⁾。海事系大学である強みを活かした「日本語と中日航海文化」というMOOCコースも特色となっている。

東北財経大学では、国際商務外語学院に日本語(国際商務方向)という専攻が設置されている。この専攻では外国語である日本語を主幹とし、商務と人文的教養を両翼とするという教育方針を取っている。ビジネス交渉・商談・翻訳の模擬実験などを行える多機能実験室も備えている⁽⁹⁾。

遼寧轻工職業学院では、「航空服務系」という部門に空中乗務、民航運輸服務、民航安全技術管理という三つの専攻が設置されている。民間航空に携わる人材の育成を主な目標としている。その一環として、各専攻では専門知識や技能に関する科目のほか、日本語科目が開設されている⁽¹⁰⁾。

4. 活動の報告

4-1 アンケート調査の結果

今回の調査には、2023年11月の時点で、中国各地における36の大学に所属する99名の日本語教師が参加した。2023年7月の時点で収集した27の大学の52名の教師による回答の分析結果は、Liu (2023) にて報告している。本稿では99名の回答の傾向を簡潔に報告する。

まず、2-1節で述べた【経験】類の質問項目の調査結果について述べる。99名のうち、47名は体系的な音声教育を行っている。ほか52名は非体系的でありながらも、必要に応じて日頃の授業に発音指導を取り入れている。例えば、「精読」「基礎日本語」「高級日本語」などと呼ばれる総合系科目では、73.74%の教師が発音指導を行っているという。ほかにも、聴解(30.30%)、発音(29.29%)、会話(22.22%)などの科目が挙げられた。また、スピーチコンテストの一環として発音指導を行っている教師も一定数いる(14.14%)。

指導の時期に関しては、大学一年(53.54%)、特に最初の五十音の入門期(71.72%)に集中している。学年が上がるにつれて、大学二年(13.13%)、三年(10.1%)、四年(3.03%)のように、劇的に下がっていく傾向が見られる。

指導の内容に関しては、アクセント(95.96%)が最も多く挙げられる。次にリズム(91.92%)、子音(90.91%)、母音(88.89%)、イントネーション(85.86%)が続く。一方で、ポーズ(69.70%)を指導している教師は比較的少なく、プロミネンス(48.48%)に至っては半数以下である。

指導の方法に関しては、発音の指摘(89.9%)以外に、日本語の音韻体系や規則に関する知識の伝授(75.76%)やシャドーイング(61.62%)も多用されている。聴覚型の補助手段(モデル音の提示やCDの再生など)の75.76%に比べると、視覚型(マークや記号など)が41.41%、運動型(手拍子や体の動きなど)が32.32%と、あまり用いられていないようである。これらの方法以外に、発音指導における母語や母方言の活用についても、教師による自由記述の回答を得た。

指導に使用するリソースに関しては、専門の発

音教材(42.42%)よりも総合型教材(80.81%)が多く用いられているようである。中国の市販の総合型教材では、序章の部分に「入門単元」が設けられ、そこに日本語の音韻体系に関する解説が書かれている場合が多い。このような教材のデザインは、前述した発音指導が入門期に集中していることと、互いに密接に関わっているであろう。

次に、【理念】類の質問項目の調査結果について述べる。「どちらともいえない」を選択した1名を除き、ほかの98名は音声教育が「非常に必要」(81.82%)か、「比較的必要」(17.17%)だと考えているようである。指導が必要な時期については、前述した実際の指導の時期と同様、入門期(78.79%)の回答が最も多い。ただし、大学一年(74.75%)や二年(27.27%)を選ぶ教師の割合は、実際の指導の時期と比べて高くなっている。

各自の教育理念に最も近い音声教育の目標について、57.58%の教師は「なるべく正確または自然な発音を身につけること」を選択した。ほかには、「日本語の音韻体系や規則を理解すること」「発音によるコミュニケーション上の問題を減らすこと」「発音に対する意識化を促すこと」を選択した教師が14%前後で大差がない。

指導に含めるべきだと考える内容に関しては、前述した実際に指導している内容とほぼ同じ傾向を示すが、プロミネンスを選択した教師が著しく増えた(70.71%)。特に、リズムの相対的重要度が最も高いと考えられているようである。

発音指導の適任者に関しては、興味深い結果が得られた。日本語母語話者(NS)を選ぶ教師が最も多いが(38.38%)、学習者と共通の母語を持つ日本語非母語話者(NNS)を選ぶ教師(29.29%)や、NS・NNSによる協働を選ぶ教師(30.30%)もNSと拮抗するほど多い。従来、中国における日本語教育では「文法はNNSが、発音はNSが担当する」という役割分担が多いと言われてきたが、今回のアンケート調査の結果から意識の変容が垣間見えた。各校の教師や学生との交流においても、「NNSだからこそできること」が認識されるようになってきていると強く感じた。この点に関しては、稿を改めて論じたい。

4-2 参与観察から見た発音指導の実態

前節で述べた西安・南京・上海・大連の大学を訪問した際に、一部の日本語科目の参与観察を行った。発音以外の科目で発音指導が行われているか、そしてどのように行われているかを把握するために、聴解、通訳、総合系科目などを見学した。総合系科目については、学生の学年によって「基礎日本語」「中級日本語」「高級日本語」などがあった。また、非日本語専攻の学生、もしくは大学院生を対象とする、「第二外国語としての日本語(二外日語)」などの科目も見学した。

「基礎日本語」や「第二外国語としての日本語」では、入学後直後の数週間が入門期であり、主に五十音の学習である。4-1節のアンケート調査の結果にもあるように、この入門期では発音指導が集中的に行われている。今回の参与観察では、同じ仮名の学習でも、読み(発音)に重きを置く教師と、書き(正書法)に重きを置く教師がいた。発音重視の教師は、かなりの時間を割いて母音・子音・特殊拍・アクセントなどの指導を行っていた。例えば、ウ段母音と中国語の/u/との違い、アクセントの概念と分類などである。中には、20分ほどかけて促音の説明や練習を行うなど、発音指導を入念に行う教師も数名いた。対して、正書法重視の教師は、仮名の書く練習を中心に行い、その過程で一部間違えやすい母音・子音、アクセントの基本的な概念など、取捨選択して説明していた。他方、「中級日本語」「高級日本語」や聴解、通訳などの科目では、学生の発話に発音上の問題点が見られた際に、教師が必要に応じて指摘し、モデルを示したり言い直させたりしていた。

一方、成都の日本語学校では入門期に五十音の集中講義が行われ、母音・子音・特殊拍・アクセントなどについて学習する。これは、前述の各大学と似ている。同時に、発音や会話の授業でも発音指導が行われている。留学を目標とする学習者が多いため、教師は自身の日本での留学・生活経験から、発音の重要性を強調していた。

4-3 交流活動の詳細や様子

音声教育に関する交流活動には、各機関の教師

や日本語関連分野の大学院生、計70人ほど参加した。以下では活動の詳細や様子を報告する。



図2、図3 交流活動の一部の様子

活動の最初では、筆者自身の経験や教育・研究活動を通して収集したエピソードを紹介し、コミュニケーションにおける発音の役割と、音声教育の必要性について考えた。例えば、筆者が来日したばかりの頃、エレベーターに乗る際に「何階に行きますか」と聞かれ、「イカイ」と答えた結果、相手には「一階」でなく「二階」だと理解され、意図しない行き先のボタンを押されたことを何度も経験した。ほかにも、ナ行音・ラ行音の弁別が苦手な学習者が、面接の会社名を聞き取れず就職活動において挫折感を覚えたというエピソードや、友人の名前をうまく発音できない自分に苛立つというエピソードなどを紹介した⁽¹⁾。

これらのエピソードを踏まえ、発音が意思疎通、他人に与える印象、学習者の自己肯定感などに及ぼす影響について、参加者と一緒に考えた。参加者からは、例えば「促音のあり・なしが子音以上

に意味理解を影響し、誤解に繋がる場合があることに驚いた」「意思疎通だけでなく、発音が他人に与える印象にも影響することに大変共感を覚えた」「学習者自身の目標設定や自己肯定感も軽視できないことを再認識できた」などの意見があった。また、参加者は自身の教育経験から、普段行っている発音指導の方法や悩みを共有した。例えば、発音指導に充てる時間の不足などといったカリキュラム上の悩み以外に、音声学的な説明を学習者が理解できない、時間が経つと元の発音に戻ってしまうなどといった指導上の悩みが挙げられた。2-1節のアンケートの【意見】類の質問項目でも、類似した調査結果が得られた。

続いて、筆者は指導上の悩みを解決するための一つの方法として、学習者の母語や母方言の活用について説明した。これは、劉(2023a)が提案する「言語間類似点・相違点に基づく理論的・実践的母語の活用方法の枠組み(TP-SD)」(図4)に基づく指導法である。

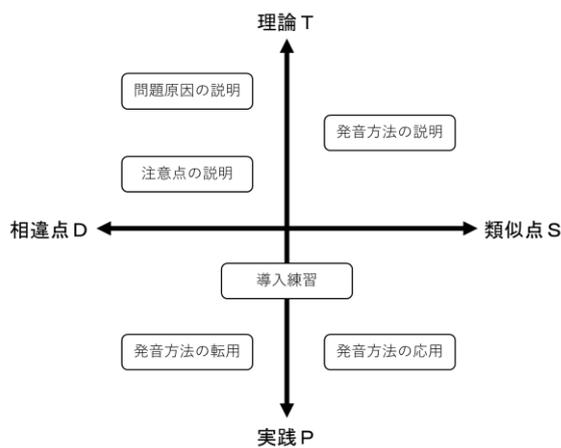


図4 母語の活用方法の枠組み「TP-SD」
 (劉 2023a : 115 より引用)

図にある二つの軸が示すように、この枠組みでは学習者の母語や母方言を目標言語の音声の学習に活用する際の方向性として、次の二つの観点を提示している。①学習者の母語と日本語との類似点(S)を活用するか、相違点(D)を活用するか。②それを理論寄り(T)の形で活用するか、実践寄り(P)の形で活用するか。この二つの観点から思考を整理することで、様々な活用方法を

考案することが可能になる。劉(2023a)では、問題原因の説明、注意点の説明、発音方法の説明、導入練習、発音方法の応用、発音方法の転用、という6種類を提案している⁽¹²⁾。

交流活動では、筆者が自身の教育実践から具体的な指導例を紹介した。例えば、学習者の母語である中国語のリズムを取って日本語のように変えて長音や撥音を練習する方法や、中国語の普通話または方言にある無声音・有声音を用いて日本語の清音・濁音を練習する方法などである。また、母語や母方言の活用に対する学習者の反応についても紹介した⁽¹³⁾。

上記で述べたTP-SDという枠組みについて、参加者から多くの質問や意見を頂いた。例えば、図4の横軸と縦軸の交差点がどのような意味を持つか、三つ目の軸が考えられるかなどである。これらの質問や意見は、上記の枠組みを発展させるためのヒントとなった。また、筆者が紹介した指導法に留まらず、参加者も各自の教育経験から母語や母方言の活用に関するアイデアを共有した。例えば、中国語の一声という高い声調を利用して日本語の高低アクセントの「高」を説明する方法や、多くの方言に存在する類似音を利用して日本語のガ行鼻濁音[ŋ]を指導する方法などがある。このように、現場の教師は日々の教育実践において、学習者の母語や母方言をうまく活用しながら発音指導を行っているようである。

参加者により共有された指導法をTP-SDの枠組みに基づいて分類すると、横軸ではS類とD類、つまり母語と日本語の類似点の活用と相違点の活用に顕著な偏りがない。縦軸ではT類、つまり言語間の異同を発音の説明に用いるような、理論寄りの形での母語の活用が多い。今後はP類、つまり言語間の異同を発音の練習に用いるような、実践寄りの形での母語の活用について、より多くの教師と意見交換を行いたい。

5. おわりに

今回の活動を通して、中国の高等教育機関における日本語音声教育の現状の一端を明らかにすることができた。36の大学の99名の教師による

アンケートの回答を踏まえたうえで、そのうちの九校における日本語科目の参与観察を通して、現場の日本語教師の教育観と発音指導の実態を具体的に把握できた。また、各校の教師や学生との交流からも、授業時間やカリキュラムなど様々な制限がある中で、発音指導・発音学習における工夫と努力を肌で感じた。中国のような同一の母語

を持つ日本語学習者が多く集まる環境において、教師が学習者の母語や母方言を考慮し、それを発音指導に活用していることが印象的であった。

本活動を通して、各教育機関の教師とネットワークを構築できた。今後も緊密な交流・協働関係を保ちながら、音声教育ないし日本語教育全体の発展を図っていきたいと考える。

謝辞

本活動は2023年度日本語教育グローバル人材奨励プログラムと早稲田大学研究助成費(2023C-249)による助成を受けている。活動に快く協力して下さった各教育機関、先生方、学生の皆様に、心より感謝を申し上げる。

注

- (1) <https://www.jpfl.go.jp/j/project/japanese/survey/result/survey21.html> <最終閲覧日: 2023年12月17日>。
- (2) <https://rwxv.xisu.edu.cn/xygk/xyjj.htm> <最終閲覧日: 2023年11月8日>。
- (3) <https://yoyxy.xafy.edu.cn/info/1691/12838.htm> <最終閲覧日: 2023年11月8日>。
- (4) <https://cla.nuist.edu.cn/2018/0709/c995a96768/page.htm> <最終閲覧日: 2023年11月8日>。
- (5) <https://dfll.fudan.edu.cn/a/7/61/c27663a304993/page.htm> <最終閲覧日: 2023年11月8日>。
- (6) <http://www.sjs.shisu.edu.cn/2713/list.htm> <最終閲覧日: 2023年11月8日>。
- (7) <https://jp.dlufl.edu.cn/xygk.htm> <最終閲覧日: 2023年11月8日>。
- (8) <https://sfl.dlmu.edu.cn/bksjy/zyjs/ryzyjs.htm> <最終閲覧日: 2023年11月8日>。
- (9) <https://sibc.dufe.edu.cn/xygk/xyjj/> <最終閲覧日: 2023年11月8日>。
- (10) <https://hk.lnli.edu.cn/xbgk/zyjs.htm> <最終閲覧日: 2023年11月8日>。
- (11) これらのエピソードの詳細は、劉(2023a: 7-9)を参照されたい。
- (12) それぞれの活用方法の詳細は、劉(2023a: 114-115)を参照されたい。
- (13) アンケートとインタビューに基づく分析の詳細は、劉(2023a: 166-199)と劉(2023b)を参照されたい。

参考文献

- (1) 寺田昌代(2015)「中国国内の音声教育事情—大学の日本語学科における発音指導—」『言語科学研究: 神田外語大学大学院紀要』21, 89-99.
- (2) 千仙永(2017)「日本語音声教育の変遷・課題・展望—日本国内における教師教育に着目して—」『早稲田日本語教育学』22, 41-60.
- (3) 戸田貴子(2011)「音声教育と日本語能力」『早稲田日本語教育学』9, 59-65.
- (4) 劉佳琦(2012)『日本語の動詞アクセントの習得』早稲田大学出版部
- (5) 劉羅麟(2023a)『日本語の音声の習得と教育における母語の役割—学習者の母語と母方言を活用した音声教育を目指して—』早稲田大学大学院日本語教育研究科博士学位論文<<http://hdl.handle.net/2065/00094211>>
- (6) 劉羅麟(2023b)「日本語の清音と濁音の指導における中国語方言の活用—受講者の捉え方から見る効果と課題—」『中国語話者のための日本語教育研究』14, 49-65.
- (7) Liu, L. (2023). Beliefs about Speech Education and Teaching Practices of Japanese Language Teachers in Universities across China. *Proceedings of the 13th International Symposium on Japanese Language Education and Japanese Studies*, pp.106-111. <https://researchmap.jp/liu_luolin/presentations/44031306/attachment_file.pdf>